

「令和7(2025)年度とちぎっ子学習状況調査」結果分析

令和7年11月
下野市教育委員会

調査について

1 調査の概要（「とちぎっ子学習状況調査」実施要項より一部抜粋）

(1) 調査の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

(2) 調査実施日

令和7(2025)年4月17日（木）

(3) 調査対象

小学校調査：小・義務教育学校第4・5学年

中学校調査：中学校第2学年、義務教育学校第8学年

(4) 調査事項及び手法

① 教科に関する調査

- ・小学校調査：国語、算数、理科
- ・中学校調査：国語、社会、数学、理科、英語

② 児童生徒質問紙調査

- ・内 容：学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等
- ・方 法：ICT端末を用いたオンライン方式
- ・質問数：小学校94問、中学校113問

③ 学校に対する調査

学校における指導に関する取組や学習環境等

(5) その他

本調査の結果は、学力の特定の一部であること、学校における活動の一側面であることに留意し、児童生徒の全般的な学習状況への指導・改善等につなげるよう留意する。

2 本市の参加状況 ※参加人数は最も多かった教科のもの

調査対象内訳	参加校数	参加人数
小・義務教育学校第4学年	9校	432人
小・義務教育学校第5学年	9校	496人
中学校第2学年・義務教育学校第8学年	4校	437人

本市の結果について

※小学校には義務教育学校前期過程、中学校には義務教育学校後期課程を含みます。

【教科に関する調査の結果】 ※下野市と栃木県の平均正答率の比較

◎ 大きく上回っている（5ポイント以上） ○ 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
 — 同程度（±1ポイント未満）
 ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） ▼ 大きく下回っている（5ポイント未満）

《小学校》

第 4 学 年			第 5 学 年		
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	国 語	全 体	○
算 数	全 体	◎	算 数	全 体	○
理 科	全 体	○	理 科	全 体	○

《中学校》

第 2 学 年					
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	社 会	全 体	○
数 学	全 体	○	理 科	全 体	○
英 語	全 体	○			

各教科の結果について



1 国語

(1) 小学校第4学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や 使い方に関する事項	情報の扱い方に 関する事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	—	○	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	—	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	—	◎

⑤ 考察

・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。

・「書くこと」の領域における記述問題（段落構成や文字数の条件に合わせ、理由や事例を明確にして自分の考えを書く問題）では、県平均正答率を5ポイント以上回った。その一方で、段落が適切に構成されていないことによる誤答が3割程度見られた。伝えたい内容をまとまりで捉え、相互の関係を意識しながら文章の構成を考える活動を取り入れるなどの工夫が求められる。

・「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、昨年度に引き続き、主語と述語の関係を考える問題に課題が見られた。主語を省略しても文意が通じるケースは多く、特に日常会話においては主語が省略されることが多い。主述の関係を扱う小単元で学んだ知識を生かして、他の教科や日常生活において文章を書く際に、主語を省略せずに文章を書いたり、主述の関係が適切であるか確認したりする場を意識的に設けるなど、継続的に主述の関係を扱うことで定着を図りたい。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	—	—	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	—	○	◎

⑤ 考察

・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。

・「話すこと・聞くこと」の領域では、司会の役割を理解して話合いを進めたり、意見の共通点や相違点に着目して自分の考えをまとめたりするなど「話し合うこと」の内容事項において課題が見られた。各教科等での話合い活動においても、国語の学習での既習事項を確認しながら話合いを進めるなど、教科横断的な視点で「話し合うこと」の内容事項を取り扱うなどの工夫が考えられる。

・「書くこと」の領域における記述問題（段落構成や文字数の条件に合わせ、伝える内容の中心を明確にして考えと事実を分けて書く問題）では、県平均正答率を5ポイント以上上回った。今後は、文章を読んで感想や意見を伝え合ったり、よりよい表現を再考したりする場を単元の途中で意図的に設けることで、児童が学習状況を振り返りながら表現力を高めようとする態度と、表現力の一体的な育成を図りたい。

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
－ 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	▼	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	▽	○

④ 問題形式別正答率

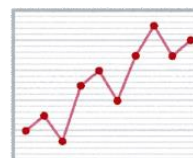
	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	▽	◎

⑤ 考察

- ・教科全体では県平均正答率を上回ったが、「我が国の言語文化に関する事項」の領域（対象問題1問）において県平均正答率を大きく下回り、結果、知識・技能の領域、短答式の問題形式においても下回る結果となった。
- ・「書くこと」の領域における記述問題は県平均正答率を大きく上回った。各教科等において意図的に書く活動を取り入れるなど、学力向上改善プランに基づく教科の壁を越えた取組の蓄積によるものと考察される。引き続き、各教科等との関連はもとより、国語科における他の領域との関連を図るなど単元構成を工夫することで、総合的な視点から国語科における資質・能力の育成を図りたい。
- ・「我が国の言語文化に関する事項」では、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して記述する問題の正答率が2割程度と低い結果になった。昨年度も課題であった内容事項であり、継続的、反復的な学習による定着が求められる。指導に当たっては、仮名遣いの暗記に重点を置くのではなく、音読を通して古文のリズムや響きに慣れ親しむなど、体験を伴って理解を深める学習過程を重視したい。

2 算数・数学

(1) 小学校第4学年



◎	大きく上回っている（5ポイント以上）
○	上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
—	同程度（±1ポイント未満）
▽	下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
▼	大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	◎

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	測定	データの活用
県との比較	○	◎	○	◎

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	◎	○	◎

⑤ 考察

・教科全体及び各種別すべての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。

・球を平面で切ったときの正しい切り口の形を選ぶ問題や、計算の間違いを説明する問題では、県平均正答率を大きく上回った。これらの結果は、図形の学習において模型の操作や観察を通して図形の性質を理解できるようにしたり、わる数とあまりの数の関係に着目し、わり算の意味について考える活動をしたりするなどの指導の工夫を行ってきた成果と考えられる。

・はかりの目盛りを読み取る問題では、県平均正答率を下回った。誤答の傾向をみると、はかりの目盛りを正しく読み取ることができている一方で、かごの重さを引かずに解答した児童が大変多かった。このことから、身に付けた知識・技能を自らの日常生活に生かす力が不十分であると考えられる。指導においては、算数の学習で表現・処理したことを振り返り、数理的処理のよさに気付くこと、さらにはそれらを生活や学習に生かすことができるよう、主体的に問題に取り組む態度を育む工夫が必要である。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	変化と関係	データの活用
県との比較	○	—	◎	—

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

・教科全体及び各種別すべての正答率において、県平均正答率と同程度または上回る結果となった。

・小数についてもとにする小数の幾つ分で考える問題や、伴って変わる2つの数量の関係を式に表す問題では、県の平均正答率を大きく上回った。数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目し、共通する単位を見いだしたり、問題場面から伴って変わる二つの数量の関係について考察したりするなど、その学習の中で必要となる数学的な見方・考え方を、児童に身に付けさせることを意識して授業を行ってきた成果と考えられる。

・数直線上の目盛りが示す分数を仮分数で表す問題や、小数×整数の計算の問題など、基礎的な知識・技能の問題で県平均正答率を下回った。仮分数と帯分数を混同したり、小数点の位置を誤ったりしたため誤答となった児童が多かったことから、知識・技能が正しく活用されているかどうかの確認が不十分であると考えられる。そのため、日頃から数学的表現を用いる機会を増やしたり、答えの見当を付けて出した答えと比べる活動を設定したりして、知識・技能の正確性を高めることが有効であると考えられる。

(3) 中学校第2学年

◎	大きく上回っている (5ポイント以上)
○	上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
—	同程度 (±1ポイント未満)
▽	下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼	大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と式	図形	関数	データの活用
県との比較	◎	○	○	◎

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	◎	◎

⑤ 考察

・教科全体及び各種別すべての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。

・三角形における折り目を作図する問題や、相対度数を求める問題では、県平均正答率を大きく上回った。日頃の授業の中で、用語を覚えるだけでなく、意味を理解しながら知識・技能を身に付けたり、知識・技能を日常の事象に活用することについて考えたりする数学的活動を行っている成果と考えられる。

・比例のグラフの直線が途中で止まっている理由を説明する問題では、平均正答率が18.2%と低かった。誤答の傾向をみると、正答である y の変域とは異なる内容を解答した生徒が38.4%と多かった。このことから、比例の関係を見いだすことはできるものの、 x や y の変域などの条件に目を向ける力が不十分であることが考えられる。日常の事象には距離や時間などの条件があることが多い。授業の中で具体的な事象を扱う際に、条件を意識しながら事象を捉え考察し表現するなどの数学的活動の場を設けることが重要である。

3 理科

(1) 小学校第4学年



◎	大きく上回っている (5ポイント以上)
○	上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
—	同程度 (±1ポイント未満)
▽	下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼	大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	○	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

<ul style="list-style-type: none"> ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。特に記述式の問題への正答率が県の平均正答率を大きく上回った。 ・「エネルギー」領域の風の強さともものを動かすはたらきに関する問題では、実験結果を基に、風の強さともものを動かすはたらきとの関係を的確に考察することができており、正答率が県平均と比べて特に高かった。 ・「粒子」領域のものと重さに関する問題では、粘土の形と重さの関係について、提示された予想に沿う結果を選択する問題に課題が見られた。この問題は、提示された予想が誤っているため、児童は予想の誤りに気付かず誤答する傾向が見られた。普段の授業から実験結果を予想する際には、予想するだけで終わるのではなく、予想どおりになった場合にどのような結果が得られるのかまで考えさせることが重要である。 ・昨年度に引き続き、方位磁針の使い方に関する問題に課題が見られた。方位磁針を使用する機会を増やし、体験を通して正しい使い方を理解できるようにするなどの指導の工夫が必要である。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	○	○	○	—

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

<ul style="list-style-type: none"> ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。 ・「生命」領域の季節と生き物の様子に関する問題では、季節と植物の生長や動物の成長の様子を関連付けて理解することができており、県の平均正答率を上回った。身近な自然環境に基づいて季節の変化と生物の成長の関係を適切に捉える力を身に付けている。 ・「粒子」領域の結露に関する問題では、窓に結露が発生する理由を説明する問題において課題が見られた。特に、空気中の水蒸気が冷やされて液体となり、窓に水滴として現れるという現象を、実際の観察結果と関連付けることが難しかったと考えられる。実験結果と身近な事例を結び付けて理解させ、根拠をもって説明できるようにする指導が重要である。 ・「地球」領域の水のしみこみ方と土の種類に関する問題では、水のしみこみ方と粒の大きさを関連付けて考えることに課題が見られた。実験の結果だけに着目するのではなく、事象と条件を関連付けながら考察し、根拠をもって説明する力を育成する指導が重要である。

(3) 中学校第2学年

- | |
|----------------------------|
| ◎ 大きく上回っている (5ポイント以上) |
| ○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| — 同程度 (±1ポイント未満) |
| ▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満) |
| ▼ 大きく下回っている (5ポイント以上) |

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	エネルギー	粒子	生命	地球
県との比較	○	—	○	—

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	—	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	—	○

⑤ 考察

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度または上回る結果となった。・「エネルギー」領域の光の性質に関する問題では、実験結果から凸レンズの焦点距離を求める問題において、正答率が県平均を大きく上回った。・「粒子」領域の気体の性質に関する問題では、気体の性質や、その発生方法の理解に課題が見られた。発生する気体を予想させ、その収集方法を考えさせた上で実験を行い、観察結果と照らし合わせながら理解を深めることが重要である。・「地球」領域の地層に関する問題では、地層の成り方と時間的な変化を関連付けて考えることに課題が見られた。授業において地層の重なりや堆積の順序に着目させ、観察結果を根拠に考察し説明する活動を多く取り入れることが重要である。 |
|--|

4 社会

○中学校第2学年



- | | |
|---|-------------------------|
| ◎ | 大きく上回っている（5ポイント以上） |
| ○ | 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） |
| — | 同程度（±1ポイント未満） |
| ▽ | 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満） |
| ▼ | 大きく下回っている（5ポイント以上） |

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	地理	歴史
県との比較	—	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	◎	—

⑤ 考察

- ・領域別では地理的分野、問題形式別では記述式の正答率が県平均正答率と同程度、それ以外の各種別と教科全体においては、県平均正答率を上回る結果となった。特に、短答式の問題では、県平均正答率を大きく上回った。
- ・地理的分野では、様々な図法の地図の特徴の理解とその読み取り方に課題が見られた。地図の特徴やその用途を理解するとともに、各単元において、目的に応じて地図を選択して課題を解決する場を位置付け、繰り返し地図を使用するなど、活用できる知識とすることが求められる。
- ・歴史的分野では、古代の日本の様子や対外関係についての理解が図られている一方で、日本の時代の推移やその背景の理解に課題が見られた。歴史的事象について、事象が起きた要因や時代背景を図示して整理したり、後世への影響を考えたりする場を設けるなど、単元の指導計画を工夫することが必要である。また、複数の資料から読み取った内容を関連付けて考察する問題に課題が見られた。日頃より、資料から読み取れることについて意見を交換したり、資料同士の関連を説明したりするなど、考えたことを表出し合う学習を取り入れていくことが大切である。

5 英語

○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	聞くこと	読むこと	書くこと
県との比較	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・日常的な話題について必要な情報を聞き取ったり読み取ったりする問題、英文を読んで短い文章の概要を捉える問題については、正答率が県平均と比べて高い傾向が見られた。
- ・対話が成り立つように正確に英文を書く問題では、対話の流れや文法事項の誤りが見られた。生徒が身に付けた知識・技能を実生活において活用できるよう、文法事項を扱う際には、形式や意味だけでなく、場面や状況と関連付けて指導を行うことが大切である。
- ・英文を聞いて尋ねられたことに対して自分の考えを書く問題、英文を読んで自分の考えを整理し、まとまりのある文章を書く問題については、無回答率が高い傾向が見られた。授業において、聞いたり読んだりした内容について、自分の考えや気持ちを話したり書いたりするなど、他の領域と関連付けた言語活動を工夫することが考えられる。

児童生徒質問調査の結果について

1 概要

質問別肯定率が算出できる項目における回答率の県平均との比較を行った（小学校調査 85 項目、中学校調査 104 項目）。

小学校第 4 学年では 51 項目、第 5 学年では 42 項目が同程度または上回る結果となった。中学校第 2 学年においては、53 項目が同程度または上回る結果となった。

2 各学年の結果

(1) 小学校第 4 学年

【特に良好な結果となった項目】

授業であつかうノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いている。
--

授業の中で、目標（めあて・ねらい）がしめされている。

家の人と学習について話をしている。

新聞を読んでいる。

しょう来のゆめや目標をもっている。

【課題が見られた項目】

社会の学習は好きですか。

家で、学校の授業の復習をしている。

自分の行動や発言に自信をもっている。

(2) 小学校第 5 学年

【特に良好な結果となった項目】

新聞を読んでいる。

歴史上の人物やできごとをあつかっているテレビを見たり本を読んだりするのは好きだ。
--

算数の授業で問題のとき方や考え方が分かるようにノートに書いている。

分からない国名や地名があつたら、インターネットや地図帳などを使って調べている。

国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。
--

【課題が見られた項目】

むずかしいことでも、失敗をおそれないでちょう戦している。

早ね、早起きを心がけている。

家で、テストでまちがえた問題について勉強をしている。

(3) 中学校第2学年

【特に良好な結果となった項目】

授業の最後に、学習したことをふり返る活動をよく行っている。

家で、学校の授業の予習をしている。

クラスは発言しやすい雰囲気である。

授業で扱うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いている。

将来の夢や目標をもっている。

【課題が見られた項目】

技術・家庭の学習は好きですか。

理科の学習は、将来のために大切だと思いますか。

先生は学習のことについてほめてくれる。

(4) 考察

- ・授業に関する内容では、目標（めあて・ねらい）を示すことや、授業のまとめや振り返りを行うことに関する項目での肯定的回答の割合は、県平均を上回る傾向が見られた。また、学年が上がるにつれて、グループなどでの話し合い活動に進んで取り組んでいる傾向が見られた。その一方で、難しい問題に挑戦しようとしたり、分からないことや疑問に思うことを分かるまで調べたりすることに関する項目の肯定的回答の割合は、県平均を下回る傾向が見られた。今後は、児童生徒の学習意欲を更に引き出すために、課題設定や課題解決に向けた学習過程を工夫するなど、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、各校の分析結果を基に授業の工夫改善を図りたい。
- ・家庭学習に関する内容では、学年が上がるにつれて、授業の予習や復習に取り組んでいる傾向が見られた。更に家庭学習の習慣化や学習意欲の向上を図るために、学習計画の立て方や家庭での学習方法を発達段階に応じて指導することが考えられる。
- ・将来の夢や目標をもっている児童生徒が多い一方で、家庭で将来のことや学習について話をするに関する項目では、学年が上がるにつれて、肯定的回答の割合が県平均を下回る傾向が見られた。保護者への啓発を行うなど家庭と連携を図りながら、子供の頑張りを認め励ますなど、一人一人のよさを認め伸ばしていく働き掛けが大切である。

今後、分析結果を学習指導や生活指導の工夫改善等に生かし、児童生徒のさらなる学力向上につなげていきます。